

# 第一回 戦略論ゼミレポート

文科 類 1年 110602H

川浦 史雄

E - M a i l : [g110602@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp](mailto:g110602@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp)

## 0.はじめに ~アメリカ同時多発テロを考察する際の視点について~

### 0 1 . 本レポートの目的

この度の多発テロについて、戦略論的視点から今までの状況、今後の展望を分析することが本レポートの目的である。筆者に「戦略論的視点」と偉そうに言えるほどの力量があるかはややあやしいが、兎にも角にも今までに得た知識からできるだけその視点に近づけるよう努力をしてみる次第である。

### 0 2 . 当事者

ここでいう当事者とは、勿論テロの被害者などではなく、その後の報復戦争に至るまでの意思決定に関わった、そしてこれからも大きく関連するであろう立場にある組織や個人を指すものである。

G.Alison の概念のレンズを考えると、低倍率ではアメリカ合衆国・アフガニスタン、中倍率ではアメリカ政府・タリバン、高倍率では Bush・Bin Laden とするのが妥当であるように思う。戦争の当事国、その国の指導政府、それに大きな影響力を持つ人物、と考えられるからである。キリスト教・イスラム教という区別や南北問題として見る向きもあるが、今あげた二つは前述のレンズの各当事者、あるいはテロ・紛争のニュースをうけた第三者にとっての考え方の問題であると言える。

以上の分類において、アメリカ合衆国・アメリカ政府・Bush を「アメリカ側」、アフガニスタン・タリバン・Bin Laden を「タリバン側」と呼び、以下論を進めて行きたい。なお、「戦争の当事国」については、とった行動とその民衆の反応を視点の中心に置く。

### 0 3 . 論点

アメリカ側・タリバン側の立場についてを簡単にまとめ、その後に今後の展望を予想する。

## 1 . タリバン側の立場

### 1 1 . アフガニスタン

今回の報復戦争において最も甚大な被害を受けたのは間違い無くここであろう。もとより豊かとは言えない国である上に、多くの難民の発生・海外からきたNGOの撤退・北部同盟との内戦により厳しい状況に晒されている。アメリカ側の報道では、民衆はタリバンの徴兵を嫌がっていると伝えられるが、タリバン側は多くの民衆がタリバンの要請に応えアメリカの横暴に立ちあがったという。

どちらが真実か確定的には言えないが、北部同盟が動いている以上、侵略者に対する聖戦という考え方が民衆一般に抵抗無く受け入れられているとは思いたい。苦しい生活におわれ、「何でもいから戦争が終わってほしい」と考えているのが多数ではなかろうか。しかしながら、アメリカに対する憎しみがあることも当然であり、現在アメリカを支持している周辺のイスラム教国家がアメリカに敵対することがあれば、反アメリカの流れが主流となると考えられる。

### 1 2 . タリバン

Bin Laden の身柄引渡しを拒否していることから、基本的に Bin Laden の思うままに動いてい

ると言える。アメリカの攻撃に乗じた北部同盟の攻撃があり、政府として重度の危機に陥っている。その状況下でなおアメリカとの和解を選ばなかったと言うことは、Bin Laden と運命を共にする覚悟を決めているようだ。しかし、パキスタンへ亡命した穏健派の人間がいることは見逃せない。Bin Laden が国外へ逃げるようなことがあれば、穏健派が勢力をもってアメリカと和解する可能性もある。

ちなみに今回のテロがタリバンの仕業ではないとすると話が変わってくるのだが、アメリカ側の捜査と、犯行声明の無いテロという特殊な性質を考えるとやはりタリバンの仕業であると思われる。通常、テロはなんらかの政治的目的を持っているもので、例えば政治犯の釈放などを求めて声明を出すものである（内部抗争での要人暗殺などの場合はあてはまらないが）。声明が無いと言うことは、声明を出しても意味の無いことが目的だということである。そうすると、アメリカ側が絶対に応じないであろう目的（アメリカの打倒？）を持つタリバンは有力な筋であり、また飛行機訓練学校に通っていたテロ実行犯の容疑者の共通点を考えるとそうように思われるのだ。

### 1 3 . Bin Laden

まず、Bin Laden は抑止の効かないテロリストであるのか考えねばならない。彼は富豪の家に生まれ、資産運用で財をなし、イスラム原理主義のテロ集団の指導的立場にあるとされる。しかしながら、彼は海外の銀行に口座を持っていた。ということはイスラム教で禁じられている利子を得ていたことになる（余談だが、イスラム教の銀行は利子ではなく、配当として食糧などの形で顧客に利益を還元しているらしい）。このことから、彼は厳格なイスラム教徒というよりも、目的のためならある程度鷹揚な手段を採れる合理主義的な面があることがわかる。

それでは、今回彼がテロに踏み切ったのは、アメリカと戦争をして勝つ自信があったからなのだろうか？おそらくそうではない。彼の最終目的は所謂殉教者のなところであり、アメリカ側及び世界経済に大きな打撃を与えることができれば死を厭わないとも考えられる。合理的な側面を強調すれば、アメリカに勝てはしないものの、生き延びられる目算があるからテロを実行したととれるのである。

今回のテロにおいて声明を出さなかったのは、アメリカ側が放っておくならそれでよし、仕掛けてくるならあくまで被害者面を貫こうという考えがあったのだろう。そしてなにより、あわよくばキリスト教対イスラム教という図式に持ち込むことを狙っているに違いない。今回の報復戦争がそういった図式に発展した場合、報復戦争に必ずしも積極的でない国々が傍観、あるいはイスラム側を援助することがありうるからである。そうなればアメリカと対等以上にわたりあえるであろう。

つまるところ、現在の Bin Laden の目的は、宗教戦争に持ち込むことにあると私は見ているのである。

## 2 . アメリカ側

### 2 1 . アメリカ合衆国

テロの直後、アメリカの民衆は激しい怒りに包まれた。報復戦争の支持が 70% にまで達したとも聞く。蓋し当然のことである。犠牲者の遺族の悲しみは言うまでもなく、無慈悲なテロを許しておく道理は無い。

その一方、報復戦争が長期化しアフガニスタンの悲惨な現場が報道されることもあり、戦争反対の動きが少なからずあることも又事実である。

アメリカ国民としては Bin Laden・タリバンを許すことはできないが、戦争で無実の人が苦しむのは嫌だと言う立場である。政府が Bin Laden 引渡しを要求し、敵は Bin Laden 個人だと言っていることには賛成が多数であろう。テロが飛行機四機の墜落だけに留まっていれば、怒りと悲しみはやがて癒されて行くものだが、炭素菌がテロと目される以上国民の反テロ感情は煽られ続ける。しかし、戦争の長期化・陸戦突入、それに伴う米軍の被害拡大があれば世論は戦争反対に傾くことも予想される。

## 2 2 . アメリカ政府

今のところどうやらほぼ一枚岩で動いているようである。私のもつ政府関係者各人の情報量が少ないからかもそう思えるのかも知れないが。とりあえずここでは Bush とほぼ同一として考えることにする。

炭素菌についてであるが、国民の反テロ感情を煽るために政府が自作自演している、という可能性が完全に否定できるわけではない。国民と政府の信頼、人命尊重の精神がこの仮説への反証である。イスラム原理主義のテロ組織・人種差別者だけでなく、歪んだ愛国者という存在も考えておくべきかもしれない。

### 2 - 3 . Bush

基本姿勢は「テロに対して妥協しない」ということにある。それ故に空爆を実行したが、世論が敵に回らない内に速攻でケリをつけてしまいたい立場にいる。確定的な証拠が無いままタリバンへの攻撃に踏み切った裏には、イスラム原理主義テロの中心的存在である Bin Laden をどうにかするいい機会だと考えたこともあろう。そして当然宗教戦争は回避したいと思っており、Bin Laden とタリバンだけが敵である旨を強調している。

教官殿は報復戦争を抑止の一環として捉えているようであるが、報復によるテロの抑止よりも、Bin Laden の始末が狙いであると考えた方が辻褄があうのではなからうか。

## 3 . 周辺国家など

### 3 1 . アメリカ側支持

多くの先進国がこれにあたる。日本もその一つであり、アメリカ軍を支援する動きを見せている。また、アフガニスタン周辺の国家（パキスタン・イランなど）は直接的な軍事支援ではないが、タリバンに対する懸念を表明し、一応はアメリカの支持に回っているものが多い。ただし、イスラム国家群は宗教戦争の様相に至った場合、アメリカ側に敵対することが充分あり得る（この場合、タリバン側支持とは言い難い。タリバンのためではなくイスラム教のためにうごくのであるから）これらの国家も全面的に報復戦争を支持しているわけではなく、内部に戦争反対の動きを抱えている。

また、アメリカの軍事侵攻には反対をしているがタリバン側の支持でもない国々は、反テロという立場は同一である点ではこちらに属すると言える。

国ではないが、混乱に乗じてアフガニスタンで政権を握ろうとする北部同盟もこの群であると

言ってよい。

### 3 - 2 . タリバン側支持

表立って国をあげての支援を表明している国はどうやら見当たらないが、テロのニュースが流れた際、パレスチナでは歓声があがったと聞く。アメリカの支援するイスラエルと敵対関係にあるこの辺りではアメリカに対する反感が根強く、きっかけがあれば公然とタリバン側の支持に回る可能性がある。

## 4 . 今後の展望

### 4 1 . 考えられるパターン

以上から考えるに、おおまかに言って、宗教戦争に持ち込まれるか否かが最大のポイントである。そのためにアメリカ側・タリバン側がどう動くかを予想していく。

まずアメリカ側としては、とにかく早く Bin Laden の身柄（それが死体でも）を確保することにある。Bin Laden を逃がさない包囲網の徹底と、現地での陸軍の活動が鍵となるだろう。空爆だけでは埒があかなし、ここまでやって撤退という選択肢を選ぶこともできないからである。

タリバン側からすると、Bin Laden に英雄として死んでもらうという選択肢がある。これによって宗教戦争に持ち込める可能性がある。Bin Laden としては狙い通り、タリバンとしては上手く行けば政府存続の可能性があがるだけに、成功すればまずまずの選択肢と言える。しかしながら、これは一部の過激な原理主義者を勇気付けることにはなるが、一般のイスラム国家にとってはアメリカと敵対するほど Bin Laden の存在は重要だと言いきれないところがあり、失敗に終わる確率が高い。次の選択肢は、Bin Laden がパレスチナに逃げ込むことである。パレスチナにタリバンを受け入れる組織があるかはわからないが、Bin Laden がパレスチナに行くことができれば、アメリカ側は当然 Bin Laden の身柄引渡しをパレスチナに要求することになる。ここでパレスチナが断ればアメリカは進退極まる。テロの親玉を見過ごすことはできないが、さりとてイスラム教の聖地に武力で踏み入ることはイスラム教を敵に廻す危険が大きいからだ。しかも、このような混乱が生じれば、当然イスラエルはパレスチナに攻め入ろうとするであろうし、そのことは宗教戦争に入る引き金となり得る。「～すれば」が多い推論であるが、合理的側面から見た Bin Laden が戦争を決意した根拠が、パレスチナに逃げ込めることであった場合、こうなる可能性は高いのではなからうか。しかしこの場合、タリバン政権はおそらく崩壊していることが欠点である。

### 4 2 . 結論

上記の推論を鑑みるに、タリバン側が第二の選択肢をとれるのは、Bin Laden があらかじめパレスチナに強力なコネがある、アメリカの包囲網を突破する手段があることが必要となると言える。今になっても国外に逃げようとしな（もう逃げ出しているがアメリカ側がそれを掴んでいないだけ、なんてことでなければ）ことを見ると、その可能性は薄いと思われる。

Bin Laden はおそらくアメリカ軍によって打倒されるであろう。Bin Laden に対しての周りの反応を見る限り、それによって宗教戦争に持ち込まれることもない。一応はアメリカ側の思惑通りになるだろう。

しかしながら、一部の過激派のテロ活動は活発になるであろうし、アフガニスタンやパキスタンのその後の混乱へのフォローも必要となる。アメリカ側はその辺りのことを考えつつ動いて行くべきである。